
エメラルドグリーンの瞳に映る世界

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エメラルドグリーンの瞳に映る世界

【Nコード】

N5730E

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

私が生み出した異形の生き物、メリアード。美しい彼に挨拶をすることから、私の一日は始まる。無邪気で純粋な彼を観察するだけで満足していた私の毎日。そんな日々にならぬ唐突な変化が訪れることになるなんて、想像もしていなかった。

(前書き)

この作品は、青蛙さま主催の異形の物フェスタに参加したものです。

今日も私の一日は、彼に挨拶することから始まる。

きらきら光るドームの中、色とりどりの花々と木々に囲まれ、その間を流れる小川で水浴びをしている、美しい彼。

金の髪がゆるく波打ち、流れ落ちる先の白い背中、相変わらず滑らかで見惚れるほどだった。

「おはよう、メリアード」

透明なガラスは思いのほか分厚いんだけど、それでも私の声は通るらしい。

メリアードはたちまち水飛沫をあげて、振り返った。その顔に浮かぶ純粹な笑顔は、いつにも増して癒されるものだった。

「今日もご機嫌はいかがかしら？ 昨日はよく眠れた？」

問いかけながら、私はドーム前に設置された液晶画面に触れる。認証を終えたコンピュータが立ち上がり、いつものように彼のデータを見せてくれた。

先ほどの問いへの答えなのか、それともただ嬉しさのためなのか、メリアードは大きな黄金色の翼を何度もはためかせてみせた。

それでも空へ飛び上がることはない。小川にひたした下半身はそのままに、翼を閉じたメリアードはエメラルドグリーンの優しい瞳でこちらを見つめているのだった。

翼の調子も正常。下半身の尾ひれや鱗にも異常はない。

冷静に彼の体に埋め込まれたチップからの情報を読み取りながら、私は笑顔だけを返してやった。

エアコンで快適な温度に保たれているドームの中といえども、やはり水の中が気持ちいいのだろう。

毎朝の測定を済ませて、私はメリアードに手を振り、コーヒーを入れに自室へと戻ることにした。

ブラックの渋みが胃の中に染み渡っていく。同時に体が完全に目覚めていくこの感覚が、私は好きだった。

この研究所内の一室に住み始めてから、もう何年が経ったのかもわからない。

研究者だった父と母が亡くなってから、親戚をたらいまわしにされる生活に疲れて、私は博士を頼ってこちらへ移った。

その博士も今は亡く、私はいつの間にか責任者という立場になっていた。

デスクの上に飾られたフォトフレームに映る博士をちらりと見て、最後の一口を飲み干した。

そろそろ、メリアードが昼寝から目覚める頃だ。

食事は自動的にドームに届けられるようになっていたとはいえ、やはり顔を見せてやったほうが喜ぶだろう。

ガラス張りの自室からも、下のドームはよく見通せる。

木陰に作られたメリアードの寝床から、ちょうど彼が伸びをして起き上がるのが見えた。伸びといっても、手の代わりに翼を伸ばしているのだけだ。

「今日の昼食はどう？ 美味しい？」

私の言葉に、メリアードはやはり笑顔だけを浮かべる。せめて、頷くぐらいはできればいいのに、そんな考えが浮かびかけるのを、私はあわてて押しとめた。

望み過ぎてはいけない。あせりが一番の敵なのだから。

メリアードの脳波からは、喜びのデータが出ている。彼が食事を楽しんでいるのは確かなのだ、私は小さなため息を隠して笑ってみせた。

誰もいない通路をゆっくりと散歩する。カッン、カッン、と響く自分のヒールの音に合わせて、メリアードが踊っているのが見えた。

金の髪が背中なたてがみと触れ合って、楽しそうに飛び跳ねているみたいだと、いつの間にか私は笑顔に戻っていた。

白い壁に突き当たって、私は足を止めた。外へ出なくなっただけから、もうどれくらいが経つのだろう。

何十人といったスタッフも今はいない。残っているのは、自分一人だ。

最初は気が狂いそうになったものだけけれど、今ではすっかり平気になった。

食糧も電気も水も、全ては自動循環システムで作り出せる。半永久的に生活に困ることはないのだ。

この無機質な研究所の建物と、美しいドームだけが私の世界の全て。

そのことに、今では疑問すら持たなくなっていた。

何も無いケージが並べられた通路の端で、私はまた引き返す。そして歩き始めるのは、メリアードのいるドームを目指してだ。

幾つものデスクやコンピューターの前を通り過ぎて、私は天井の人工太陽光に照らされる、唯一の楽園へ辿り着くのだった。

完璧な美貌を備えたメリアード。

微笑んで、嬉しそうに私のもとへ羽ばたいてくるその姿は、確かに異形のものなのだろう。

人間の上半身に、馬のたてがみと、鳥の翼、そして魚の下半身四種を結合させて、成功した初めての実験動物。

人の遺伝子と組み合わせても、互いに反発しあわないようにするまでは、かなりの年数を費やしたものだ。

考えただけでも誇らしげな笑みが浮かぶのを、私は止めもしなかった。

全世界が私を褒め称える　そんな夢をいまだに見てしまう。
無駄なことだとわかっていても、惜しまれるのだ。

あと少し、世界の滅亡が遅かったなら、と。
なぜこの研究所は無事なのか、なぜ自分だけが生き残ったのか。
何一つわからない。

ただわかるのは、外の世界への通信は全て途絶えてしまった。
何日も、何年も、変わらないこの空間で、私は初めて悟ったのだ。
世界はきつと、滅びてしまったのだと。
それでもいい。メリアードがいてくれるなら。

私の最高の　愛玩動物が。

そんな日々への変化は、突然に訪れた。

いつものようにドームを覗いていた私は、信じられない思いでデ
ータ入力の手を止めた。

「……あ、よう。お、はよう」

はつきりとメリアードの口が動いていた。

「メ、リアード……？」

自分の手が震えている。いや、手だけではない、足も、体も。

これは一体、どういうことなの？

思わず、そう誰かに問いかけたくなつた。

そうだ、誰もいないのだ。私のこの驚きを　いや、感動を伝え
られる相手は。

しかし、そんなことに構っている場合ではない。私が声も出せな
いでいる間にも、メリアードは何度も練習して、ついには微笑みな
がら言ったのだ。

「おはよう。よく眠れた？」

いつも私が何気なくしている朝の挨拶。

その言葉は、一方通行ではなかったのだ。彼はきちんと理解して、

しかも今初めて、彼からも交信を始めたのだ！

何年も言葉を発さなかったとは思えないほど、メリアードの成長は早かった。

一週間足らずで毎日の挨拶を、二週間目には身の回りの物の名前を、そして三週間が過ぎる頃には、ドーム内の全ての物を指す単語が言えるようになっていた。

嬉しくて、嬉しくて、私は毎日彼に言葉を教えた。

メリアードも新しい言葉を覚えるのが楽しくて仕方がないようだった。

そして数ヶ月が過ぎた頃、簡単な会話は成り立つようにさえなっていたのだ。

「ねえ、太陽はどうして明るいの？」

この日の会話も、私が答えに困るような質問から始まった。

「そうね」

本当は人工の太陽だけれど、それでも説明はすることができる。

でも今のメリアードには、難しく何がなんだかわからないだろう。せつかくの彼の意欲に水をさしたくなくて、私は結局微笑んでやっただ。

「きつと……メリアードに、世界をちゃんと見せてくれるためじゃないかしら」

「ふうん」

私の答えに納得したのかどうなのか、メリアードは青い鱗が綺麗に並んだ下半身を、水から跳ねさせて遊んでいる。

「どうして世界を見せてくれるの？」

忘れた頃にまた飛んできた答えを聞いて、私は笑った。

「うーん……だって世界はとても綺麗なもの。そうでしょう？」

「きれい……メリアード、よくわかんない」

子供のような口調に、私は微笑む。そうだ、まだメリアードの頭

は、子供と変わりないのだ。生まれたての子供。

「メリアードの髪も、瞳も、とつても綺麗よ。背中なたてがみも、大きな翼も、それに尾びれだって　メリアードはすごく綺麗だわ」
本当に本心からそう伝えた私に、メリアードはまだよくわからないような顔をしながらも笑い返した。

「じゃあ、あなたもとつてもきれいだよ。メリアードとは違うけど……ねえ、どうして翼も尾びれもないの？」

無邪気なその言葉に、私は笑顔が消えていくのを感じていた。

そもそも、なぜこの実験は始まったんだっただろうか。

たくさんの空のケージと、メリアードの眠るドームを眺めながら、私はぼんやりしていた。

夜を示す、人工の月が優しく彼を照らしている。

父と母、そして博士の代から既に研究は始まっていた。何の疑問もなく受け継いで、私は研究者を志した。

そんな自分を誇りに思っていた。今でも、立派にメリアードを生み出した自分を誇らしく思っていることは変わらない。

けれど。

寝返りを打ったメリアードが、尾びれをぴくりと動かしている。

夢でも見ているのだろうか。

メリアードが見る夢とは、一体どんなものなのだろうか。

今まで考えたことのなかったその疑問に、なぜだか重苦しくなる胸。

数々の失敗例、処分した実験体　そんなものが突如浮かんで、

私は頭を振っていた。

考えてはいけない。考えてはいけないのだ、そんなことは。

どんどん重くなる私の心とは裏腹に、メリアードの寝顔は天使のように純粹だった。

「こんにちは。今日は遅かったね」

変な夢にうなされて、珍しく寝坊をした私をメリアードが笑顔で迎えた。

「もうお昼だから、こんにちは、で合っているでしょう？　メリアード、よく覚えたよ。朝食もちゃんと食べたよ」

私の立つガラスの前に、メリアードは張り付いて、翼をぱたぱたと動かした。

「そう、えらかったわね」

ようやく浮かべた笑顔を見て、メリアードは何か気づいたように首を傾げた。

「どうしたの？　何か元気がないみたい。悲しいの？」

心配するようにこちらを見つめるメリアードに、私はあわてて微笑んだ。

「いいえ、大丈夫よ。大丈夫」

「そう、それならいいけど」

ほっとしたように呟くメリアードの言葉を耳に、私はぎくりとしていた。

悲しい、なんて言葉、いつの間に覚えたんだろう。

ただ素直に可愛がれたはずのメリアードが、段々自分の手から離れていく気がする。

半身を小川に沈めて遊ぶ彼を見ながら、急に思った。

彼は、全身を水に沈めることはできないのだ。

翼が濡れては、羽ばたくことはできない。だからせいぜい水浴び程度しか不可能で　たてがみはあっても、馬のような足もないから、走ることもできない。

人の顔をしていても手がなから、食事だって動物のように口で食べるしかできないのだ。

なんて中途半端な生き物なんだろう。

ふと思いついたその考えに、私は冷たい汗が流れるのを感じてい

た。

そうだ、そんな風に作ったのは、この私。私が生み出した、神の意に反した生き物。それが、メリアードなのだ。

見やった先のメリアードは、そんな私の心など夢にも思わない笑顔で、水と戯れて遊んでいた。

茶色の小瓶　　その中で揺れる赤い液体を、私は静かに見つめていた。

「ねえ、それは何？」

ふと聞こえたメリアードの声で我に返る。

「何でもないので、メリアード」

笑顔を見せたら、メリアードは一瞬だけ首を傾げた後、またお気に入りの水浴びに戻っていった。

どうしてだろう。最近こうしてこの小瓶を見つめる時間が増えた。今までは、見ることにすら嫌だったはずのこの薬を。

途中でストップしたままの秘密の研究、担当者もいなくなり、あえて続けもしなかったもの。

そのデータファイルを開きながら、私は無意識に爪をかんでいた。苛々していたり、なぜか心が落ち着かない時によくやっていて、昔博士にも注意されたくせだった。

もう何年も、ことなくせは出ていなかったのに……。無邪気なメリアードを眺めながら、今までのように微笑めなくなつたのはいつからだろう。

彼を見つめる自分が、なぜか急に汚らわしいもののように思い始めたのは、どうしてなのか。

その日は、深夜メリアードが眠ってしまったっても、私はいつまでも研究データを見続けていた。

それから幾日もしない昼のことだった。

もはや日課となった言葉の勉強を終えた午後、メリアードが言ったのだ。

「ねえ、物には全部名前があるんだよね？」

「ええ、そうよ。どうしたってというの、突然」

何を言おうというのか、微笑みながら振り返った私をまじまじと見た、彼の一言。

「じゃあ、あなたの名前は何て言うの？」

その問いを聞いて、思わず笑いながら答えようとして　開きかけた私の口は、そのまま固まった。

自分の名前、そんな簡単なこと、瞬時に答えられるはずなのに。なぜか全く思い浮かばなかったのだ。

どういうこと　？

私の名前、そう、私は……何と呼ばれてきた？

何年も名前を呼ばれることもなかった、ただそれだけから来ることとは思えないほどに、何一つ出てこない。

私は、一体誰だった　？

まるで足の先まで冷えていきそうな感覚に包まれて、私は立ち尽くす　そんな私にメリアードが何か声をかけようとした、その瞬間だった。

突然、研究所の扉が開いたのだ。

窓も封じて、外の世界さえ見ることもなかったここ数年の間にもっていたような空気が、一気に舞い上がった気がした。

「タイムオーバーだ」

そんな声が、壁中を伝わるように聞こえた。

誰　そう言いかけた私は、目にした異様な光景に声も出せなく

なる。

先ほど聞こえたのは確かに人の声であったはずなのに、扉の向こうからまぶしい光と共に現れたのは、黒い影のような物体だったのだ。

ぞろぞろと蠢く幾つもの物体は、まるで生き物のようにこちらへと迫ってきた。

「意外と早かったものだな」

「いや、知能のわりには遅かった」

「移植した記憶の中枢に触れられてしまっただけは、人工知能が動かなくなるからな。まあ、ここまでと言うことだろう」

いくつもの声は、その影たちから聞こえてくるようであり、また空気全体を伝わってくるようでもあった。

おかしな感覚の中、それでも彼らが自分たちの話をしていることはわかった。

「ちよつと待って、一体どういう」

近寄ってくる黒い影たちに問いかける私のただごとではない様子で、メリアードも怯えている。

彼を守るように、私はドームの前で両手を広げてみせた。

「無駄だ。もう実験は終了。お前の役目は終わった。この実験体は、我々の手に移る」

顔も何もないはずなのに、冷たい響きを持って返ってきた声で、私は彼らの正体も目的もわからないまま、危険を感じた。

「待って　メリアードには、指一本触れさせないわ!」

助けを求めるように私のいる後ろ側に隠れたメリアードを守るべく、私は精一杯の声を張り上げた。

すると、影たちは不気味にも笑ってみせたのだ。

そして私の目前まで迫って、言う　。

「何を言っている。散々自分が手を加えてきて、他の者にはそれを禁じるというのか?」

「今更、正義を語るのか?　お前は　いや、お前たち人間が、既

に神の領域を侵しておいて、惑星一つでは足りぬか。生き物全てをその手にしたつもりか？」

「そんなことを言うなら、この動物を何のために生み出した？ 一人では生きられもせぬ 不自由で哀れなこの生命を」

せせら笑うようだった声が、どんどん大きくなって、研究所全てが笑っているようにすら聞こえる。

なんとか虚勢を張っていた体が、徐々に震え出す。

全身の血の気が引いていくのを、私は遠く感じていた。

『あなたの名前は何て言うの？』

遠のく意識の中で、再びメリアードが笑う。ゆらぎかけた体が、頭が、すんでのところまで留まるのがわかった。

そして目にしたのは、自分の胸にかけられた銀のロケット。

震える手で開いたその中で笑うのは、幼い日の自分と両親。

記憶の中で何かが弾ける。

「いやだよ 助けて！」

メリアードの切羽詰った声が聞こえて、私は振り返った。

いつの間にかドームの中に侵入した影たちが、怯えるメリアードを取り囲んでいる。

どういった力によるものか、引きずられていこうとする彼に、私は必死でドームのドアを開けた。

無菌にするため、いつも閉じていたそのドアを初めて開けたのが、こんな瞬間であるなんて。

何ともいえない気持ちの中、私は懐から取り出したものを、メリアードの口に押し込んだ。

茶色の小瓶から流れていく、不思議な香りのする赤い液体 全てを彼に飲ませて、私はほっと息をつく。

これがどういふ結果をもたらすのかわからない。でもどうか、彼の未来に待つものが、幸福でありますように。なぜか急に痛み出した頭をおさえて、メリアードの澄んだ瞳を見つめる。

そのエメラルドグリーンの色が、自分たちが滅ぼしたものののだと、頭にかすめた。

「私はね 私の名前は、マリア。メリアード、どうか……幸せに初めて触れた彼の頬は、想像通りとても滑らかだった。

指先に残る優しい感触を胸に刻みながら、私は意識を手放した。

その直前、自分の名を呼ぶメリアードの声が、遠く聞こえた気がした。

*

「進化を促す秘薬、か」

「まだ研究は途中だったようだ。この薬がどういった効き目をもたらすのかは、彼女にもわからなかっただろうがな」

「人工知能に成り果てても、その最期でようやく、良心を取り戻したのかもしれないな」

「飛躍的な進化を遂げたなら、あるいは彼らにも この惑星^{ほし}の未来を託せるのだろうか」

「さてな ただ、あの笑顔は、幸せなようにも見える」

黒い影たちの見守る中、誰もいない緑の大地を羽ばたく命が一つ。まだ他に動くものもない広い、広い外の世界で 金の髪の異形

の青年が微笑む。

その青い尾びれを、澄んだ水に沈めながら。

「世界はね、本当にきれいだったよ。できたら一緒に見たかったな、あなたと　ねえ、マリア」

エメラルドグリーンの瞳に映るのは、彼の首にかけられた、銀のロケット。

(後書き)

異形のもの、と聞いて思いついたのが、実験動物の彼でした。そこから膨らませた結果、初めてのSFジャンルとなり、ときどきです。ここがおかしいのでは、とか、逆によかった、とか何でもご意見お待ちしています。

青蛙さま主催異形フェスタは、7月現在開催中です。

素敵なイラストやSSが掲載予定ですので、ぜひご覧下さい。

<http://aogae.ru-1114.at.webry.info/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5730e/>

エメラルドグリーンの瞳に映る世界

2010年10月8日15時27分発行